

南部曲り家

岩手盛岡
平成21年

神楽公演



懐かしさを感じる茅葺き屋根の南部曲り家
その凛とした常居を舞台に演じる神楽。
胸おとる太鼓や心揺さぶる笛の音に
躍動する神楽の体温がほとばしる幻想の一時。
昔ながらの神楽宿の雰囲気で味わって見ませんか。

- 前売りチケット取り扱い所
プラザおでって、おもてなしプラザ
岩手県公会堂、つなぎ温泉観光協会
盛岡手づくり村
- チケット予約を承ります
(当日会場で前売り料金)
日時、人数、連絡先を添えてお申し込み下さい
TEL 019-653-1058
FAX 019-653-1056
メール kagura@u-keikaku.com

会場案内
詳しくは <http://minzoku-geinoo.com/>



定員 75人	各回 大人1800円(当日2000円) 小中高生半額	1日で午前と午後を通してご覧になる場合 大人3000円(当日3300円) 小中高生半額	10月25日(日) 早池峰岳流 石鳩岡神楽	9月27日(日) 鶴鳥神楽	8月30日(日) 村崎野大乘神楽	7月19日(日) 幸田神楽	6月21日(日) 夏井大梵天神楽	5月24日(日) 早池峰神楽 岳神楽	4月19日(日) 早池峰神楽 大償神楽
			国指定重要無形民俗文化財 岩手県指定無形民俗文化財	国指定重要無形民俗文化財 岩手県指定無形民俗文化財	国指定重要無形民俗文化財 岩手県指定無形民俗文化財	国指定重要無形民俗文化財 岩手県指定無形民俗文化財	国指定重要無形民俗文化財 岩手県指定無形民俗文化財	国指定重要無形民俗文化財 岩手県指定無形民俗文化財	国指定重要無形民俗文化財 岩手県指定無形民俗文化財
			午前の部 10時30分～12時15分(開場10:00) 午後の部 13時30分～15時15分(開場13:00)						
			午前の部と午後の部で入れ替えとなります。						
			午前と午後では権現舞をのぞいて違う演目です						

おおつくないかくら 大償神楽

岩手県花巻市大迫町内川目の大償集落に伝承されている神楽です。大償集落は、岳集落から約十一キロほど下つてきた里に開けた小集落です。戸数約二十戸、人口は約百人です。産業は林業、葉タバコなどでしたが、今は林業、畑作などに変わっています。

大償神楽は、大償神社の礼祭九月十九日に奉納されます。舞初めは一月二日、舞納めは十二月初三日曜日に神楽の館で行われます。大償神楽も岳神楽と同様、町内の神社の祭礼、各種の芸能大会、年祝い、新築祝い、結婚式などの祝いに招かれることが多く、年間の上演回数は五十〜六十回を数えます。

かつては旧十一月から二月にかけて、旧内川目など近隣の村々をめぐり、昼は「門打ち」と称して各家で火伏せ祈禱の権現舞を行い、夜は泊まり宿となる民家の座敷で演じていました。この回村慣行は大償では「通り神楽」、岳では「回り神楽」と呼ばれ、大償神楽と岳神楽が一年交替で昭和初期まで行われていました。

演目は約四十番で、式舞(鳥舞、翁舞、三番叟、八幡舞、山の神舞、岩戸開きのほか、神舞・荒舞、女舞、武士舞)があり、神楽の最後には権現舞が舞われます。大償神楽には狂言も多く伝わっています。これは「進化」のとも呼ばれ、狂言田植、猿引き、金掘り、しゅうと見参、狐と狸、箱根盛所、釣り狂言、袖の沢、献上品物、鹿島、江戸見物、伊勢参りなど、観客を喜ばせる滑稽な演目があります。



たけかくら 岳神楽

岩手県花巻市大迫町内川目の岳集落に伝承されている神楽です。岳集落は八ヤチネウスノキソウなどの高山植物の宝庫として知られる早池峰山の山麓にあります。戸数約十数戸、人口およそ五十人の小集落です。早池峰山の登山基地として民宿も多く営まれています。

早池峰山は北上高地のほぼ中央部にひときわ高くそびえ、昔から登山として広く信仰を集めていました。修験道の道場としても栄え、かなりの数の宿坊があったといわれます。その早池峰山を霊場とする修験山伏によつて伝承されてきたのが岳神楽です。

岳神楽は、早池峰神社の礼祭(八月一日、宵宮七月三十一日)に神楽殿で奉納されます。舞初めは一月三日、舞納めは十二月初七日に早池峰神社の参集殿で行われます。六月の第二日曜には早池峰山の山開きにあわせ権現舞が山頂で舞われます。その他、町内の神社の祭礼、各種の芸能大会、年祝い、新築祝い、結婚式などの祝いに招かれて公演することも多くあります。

演目は約四十番で、式舞(鳥舞、翁舞、三番叟、八幡舞、山の神舞、岩戸開きのほか、神舞・荒舞、女舞、武士舞)があり、神楽の最後には権現舞が舞われます。岳神楽と大償神楽とは、表裏一体をなしているといわれ、例えば、岳の山神面が口を開けた「ウン」の型に対し、大償のそれは口を開けた「ア」の型をしています。また、岳は五拍子を基調とし、また、岳は活発な荒舞が得意です。



なついだいぼんてんかくら 夏井大梵天神楽

岩手県沿岸北部に位置する久慈市夏井町宇島谷に伝承される神楽です。夏井町にはJR八戸線の陸中夏井駅があり、久慈湾にそそぐ夏井川に沿って開けたところです。

夏井大梵天神楽は、神楽を継承して、先づき山伏修験者で、播磨の国(現在の兵庫県)から大梵天不動明王を背負って夏井に移住した大宮を建立し、その権現さまを奉じて行うカスミ(旦那)廻りの神楽を編み出したのが起源といわれています。山伏神楽系で、黒森系神楽、九戸系神楽の両系統の影響が認められるもの、そのいずれかに系列化するものと見られ、現行からは独立した一系と考えられています。

大宮神社の例祭(八月二十日)をはじめ、若宮八幡宮の例祭(旧暦八月十五日)、観山稲荷神社例祭(五月五日)で奉納されています。また久慈市内の神社の例祭や新築祝いなどにも招かれ、年間の上演回数は二十回を超えています。

演目はかつては五十以上あったといわれていますが、現在では権現舞、番舞、利生舞など二十演目があり、また、右手に扇杖、左手に扇子を持ち、また米を入れた三斗や御神酒を持ちながら舞う利生舞は、山伏神楽では珍しい演目の一つとなつています。



こうたかくら 幸田神楽

幸田神楽は、岩手県花巻市幸田の旧村社八雲神社通称、幸田のお天(天)様の例祭(旧六月十五日、宵宮十四日)に奉納されます。八雲神社には「八雲神楽講中」という崇敬者の組織があり、昼はその講中の集落の家々を回つて門かけをし、夜は神楽宿に幕を張つて神楽を演じています。昔ながらの地域の伝統が、今でも大切に受け継がれています。

由来は、藤原氏滅亡後、秀衡の三男泉三郎忠衡が落ちのびてこの地に隠れ住み、そのときに田を造り、用水確保のため幸田川をせきとめて溜池を築こうとしたが、難工事で進まないため、難工事を断つて、八雲神社、祇園牛頭天王を勧請し、神楽を奉納したのが始まりといわれています。

またその昔、幸田川の上と下にある二つの大きな沼に主(化物)がいて、この沼を埋めて堤を築いたため、その主たちは行き場を失い、夜な夜な現れ、はびこるようになった。そこで、村人たちは畏れかしこみ、神楽場で神楽を奉納したところ、怒りを鎮めることができたといわれ、以後、毎年、神楽場で奉納するようになったとも伝えられます。

演目は、岳神楽と共通しますが、その交流は早い時期に絶えてしまったようで、言立(唄文)や基調などに違いが見られます。演目を大別すると、式舞と式後の舞とに分れます。式後の舞には、荒舞、女舞などがあり、他に狂言と権現舞があります。「幸田神楽本」によると、神楽舞三十一番、狂言六番が掲載されています。



むらさきのだいじようかくら 村崎野大乘神楽

岩手県北上市村崎野地域で伝承されている神楽です。北上市は北上平野のほぼ中央に位置し、江戸時代は伊達藩と境を接する奥州街道南部藩最南端の宿場町として、また北上川舟運の拠点として繁栄しました。村崎野地区はJR東北本線村崎野駅があり、国道四号に沿って開けた地域です。

村崎野大乘神楽の由来は、元禄二年(一六八九)、村崎野開拓の成就を祈願して天照御祖神社(伊勢神社)が勧請され、山伏神楽が始まったと言われています。幕末の頃、神楽の衰退を憂いた和賀部の修験者が、宮城県涌谷の鹿岳寺で法印神楽を習得し、嘉永元年(一八四八)に再興を果たし大乗会を開いたと言われ、その後、大乘神楽と名を改めたのが始まりといわれています。

旧和賀部の北上市と花巻市箕間では、大乘神楽と総称される神楽が盛んに行われており、山伏神楽以上に祈禱色の濃い神楽で、宮城県の法印神楽の一系と考えられています。大乘神楽の特徴は、手の振り付けや結び方、足の踏み方が修験の呪法をきちんと行うところにあるように、手は腰より下げないようにし、踏み足はハンバイで東南西北中央の五方を踏み固め、悪霊を鎮めるといいます。

演目は七つ釜、庭舞、棟上、地割、龍殿、普勝舞、王の目、七五三切、魔王、三番叟、帝童と追斬、正足舞、神拝、天の岩戸、地蔵、低待、三宝大荒神舞、薬師舞、大乗の下、神舞、権現、鬼門、小山の舞、稲荷舞があります。



うのとりかくら 鵜鳥神楽

三陸海岸の北部に半農半漁の暮らしが営まれている人口三千人あまりの菅代村があります。この村の北西にそびえる標高四二四・二mの卯子西山(うねとりさん)が古くからの山岳信仰の拠点でそこで修行する山伏修験者達の手によつて鵜鳥神楽が伝承されてきました。

鵜鳥神楽が奉納される鵜鳥神社は、卯子西山の山麓に拝殿、本殿が祀られていますが、その本殿が祀られているのは山頂に本社があるといわれています。三陸沿岸の漁業関係者の信仰を集めて、大漁祈願や海上の安全を祈つて多くの人々が訪れます。鵜鳥神社は、神社の拝殿に仏像が並び、神仏混淆の名残を残しているといわれています。

鵜鳥神楽は、宮古の黒森神楽とともに三陸沿岸を代表する神楽で、どちらの神楽も冬に時期に沿って各地を訪れて神楽を上演する巡行を行っています。巡行は一年交替で久慈までの北廻りと釜石までの南廻りを繰り返します。こうした広域にわたつて巡行する神楽は限内ではこの2つの神楽だけで全国的にも貴重です。

鵜鳥神楽の演目は六十以上あるようで、役舞、投舞のマクフタケ、マクフタケ、狂言、仕組みに大別されます。このうち役舞は神楽が行われるときには必ず演じられるもので、清成、岩戸開、神楽、山の神、松迎、恵比壽舞などがあります。権現舞は神楽宿への舞込み舞立ちの際に演じられます。



いしはとおかかくら 石鳩岡神楽

岩手県花巻市東和町の石鳩岡集落に伝承されている神楽です。石鳩岡集落は、北上高地の丘陵地帯に農家が点在している集落で、戸数約七十戸、人口二百七十人です。集落からおよそ先の峠を越えれば、そこは早池峰神楽が伝わる大迫町に通じています。

石鳩岡神楽は、岳神楽(早池峰神楽)の代表的な弟子神楽です。今から約二百年前の文化二年(一八〇五)、石鳩岡の住人菊池傳右衛門が除障招福効験あらたかでも民衆娯楽性の高い早池峰流岳神楽を小国常盤守に習い、天保五年(一八三四)、近世の三大船師の間に、早池峰流岳神楽を名乗り独立することを許可されたといわれています。

昭和十三年には南部家より師匠の岳神楽と同様、幕や衣装などに双鶴の家紋を使用することを許されています。以来、盛岡の若手公園(盛岡城跡公園)にある南部家の祭神桜山神社の例大祭(五月二十六日)での神楽奉納が恒例となつています。

石鳩岡神楽は、旧小田田村社跡形神社の奉納神楽で、例祭は九月一日です。このほか、市内の神社の祭りや各種の芸能大会、あるいは依頼に応じて年祝いや新築祝いなども随時公演しているほか、福祉施設での公開演も行っています。

